俚語に関する多元的発生の仮説

長尾勇

はしがき
一、「方言周圏論」および従来の批判
二、命名の方式と分布の型
イ、A型分布
ロ、C型分布
ハ、B型分布
むすび

はしがき

昭和のはじめ、柳田国男氏が「蝸牛考」を発表された当時、金田一京助博士は、これを「方言研究の究極の典例を示すもの」と激賞されたという。確かに「蝸牛考」全篇にわたって示された言語地理学的処理法の鮮かさは、三十年を経た今日においてもなお、私どもに深い感銘と刺戟とを与えるものがある。ことに、その結論ともいうべき方言周圏論は、それまで東西に対立していると考えられていた俚語の分布を、同じ中心から放射された波紋のような分布であると説明し、当時の学界に大きな影響を与えられたことは周知の通りである。その後、次々と「蝸牛考」風な研究が多くの人々により試みられたが、その大半は単に俚語を収集するのみにとどまり、また、収集地域が狭いことなどもあって、積極的に柳田説を批判した研究はなされなかったように思う。

しかし戦後になって、昭和二十三年、先ず東条操氏が辛川十歩氏の目高考を資料として俚語の分布における「方言区画

論」を論証され（註一）、続いて二十五年には、氏の「区画論」と、柳田氏の「周圏論」とにおける研究対象の違いを説明された（註二）。更に二十八年、離島僻村の俚語必ずしも古形の残存にあらずと、周圏論一辺倒を戒められたが（註三）、この年には既に金田一春彦氏も略々同様のことを指摘され（註四）、続いて楳垣実氏がそれを補説されるなど（註五）、周圏論に関する理論的な批判は活潑に行なわれた。

同じ頃、私は地蜘蛛の俚語の採集を通信調査により行なっていたが、全国的な分布図をえがきつつ、地蜘蛛の場合にも、おそらく周圏論的現象が現われるであろうと、ひそかに期待していた。ところが、子供の造語力や童詞が新しい俚語を生み出してゆくというような、俚語の発生や変遷に関しては、蝸牛の場合とも略々一致したが、全国的な分布の点ではいかにも周圏論的な解釈をくだすことはできなかった（この間の事情は、拙稿《地蜘蛛考》「国語学第十九輯」に記した）。もとよりこれには私の言語地図における読みの不十分さということも考えねばならない。しかし同時にまた、取り扱う対象そのものにも何か原因があるように思われてならなかった。この点は柳田国男氏も「蝸牛考」のはじめに《方言量》について説明された中で、

> 方言生成の主たる原因が、必ずしも国語の癖、又は歴史の偶然に在ったのではなく、地方言語の差異変化を要求する力が目的物そのものにあった。

と述べておられるが、対象によっては単に方言量のみならず周圏論的分布の様相にもいくらかずつ違いがあるのではなかろうか。中には、たとい語形の変化は激しくても周圏論的な分布を示さないものもあるのではなかろうか。蝸牛の俚語により立証された方言周圏論は、結局蝸牛の場合に最も適切なのであり、他の俚語においては夫々その適用に限界があるのではなかろうかと考えるに至った。

（註一）「国語学」第一輯《メダカとメメザコ》
（註二）「国語学」第四輯《方言周圏論と方言区画論》
（註三）「国語学」第十二輯《方言と古語》
（註四）「言語生活」昭和二十八年二月号《辺境地方の言葉は果して古いか》
（註五）「言語生活」昭和二十八年九月号《方言孤立変遷論をめぐって》

一、「方言周圏論」および従来の批判

では、柳田国男氏の唱えられた「方言周圏論」とは一体どんな内容であるのか。ここにあらためて説明する必要もない程に、広く知られ、且つ支持されている学説であるが、念のために今一度、氏の書かれたものによって、その理解を深めておくことにする。

まず、代表的なものとして「蝸牛考」改訂版の序には次の如く述べておられる。

国語の改良は古今ともに、先づ文化の中心に於て起るのが普通である。故にそこでは既に変化し、又は生れて居る単語なり物の言ひ方なりが、遠い村里にはまだ波及せず、久しく元のまゝで居る場合はいくらでもあり得る。その同じ過程が何回となく繰り返されて行くうちには、自然に其周辺には距離に応じて段々の輪のやうなものが出来るだらうといふことは、至つて尋常の推理であり、又眼の前の現実にも合して居て、発見などといふ程の物々しい法則でも何でもない。私は単に方言といふ顕著なる文化現象が、大体に是で説明し得られるといふことを、注意して見たに過ぎぬのである。この国語変化の傾向は、我邦に於ては最も単純で、之を攪き乱すやうな力は昔から少なかつたやうに思ふ。

また、同じ本の《言語の時代差と地方差》を説明された部分では、次のようにも述べておられる。

著者の結論もしくは現在力支せんとする仮定は、一言に要約すれば次の如きものであつた。曰く、「方言の地方差は、大体に古語退縮の過程を表示している」さうしてこの一篇の蝸牛考は即ち其例証の一つである。

これらは楳垣実氏が「国語学辞典」に解説された如く、「縦の歴史的現象の過程が、横の地理的現象の相違として投影されたものと説いておられる」とも考えてよいであろう。

以上「蝸牛考」に説かれた「方言周圏論」のあらましについて述べたが、これに関する批判としては、前にも挙げた諸論文がある。中でも金田一春彦氏は、まず周圏論が語彙にのみ適用さるべきことを説かれた後、

語彙の変化は文化の中心地、つまり都会で起ることも多いけれども、半面辺境地方の人は無造作な言い方に無頓着である、いろいろな拘束に縛られることが少い、というようなことから、辺境の地方に変化が先に起ることも相当あるのではないか。

と、辺境地方の言葉必ずしも古くはないということを述べておられる。これを承けた、楳垣実氏は、さきの金田一春彦氏の

説を、「方言孤立変遷論」と名付けられ、

言語体系の内部に変化の原因があり、内部変化を起しやすい面にその変化が大きく現われる場合、孤立変遷論の適用を受ける場合であり、言語体系の外部に変化の原因があり、外部変化を起しやすい面にその変化が大きく現れる場合が、周圏変遷論の適用を受ける場合である。

と解釈されて、柳田氏の説と金田一氏の説とは互に他方を否定するものではなく、対立し両立する法則であると述べておられる。これは具体的には、「習得や変更のむずかしいものほど孤立的変遷を起しやすく、習得や変更のやさしいものほど周圏的変遷を起しやすい」ということになる。楳垣氏の場合、主として音韻、アクセント、語法が習得や変更のむずかしいものであり、語彙の多くの場合がそれのやさしいものと説明されている。この点はフランスの言語学者ドーザも、「語彙の放射の際に見られる事とは反対に、音韻変化の伝播中では必ずしも社会的中心地であるとは極らない。」と、同様のことを述べている(註一)。

(註一) ドーザ著・松原秀治訳「言語地理学」富山房発行一九二頁

二、命名の方式と分布の型

イ、A型分布

しかしここで私は、孤立的変遷にも周圏的変遷にも属さない、もう一つの分布があるのではないかと考えてみた。地蜘蛛の俚語に例をとれば、ツチグモ、ジグモ、アナグモ、フクログモ等がある。これらはいずれも略々全国的な分布を示しており、日本各地において、この蜘蛛の他の俚語とともに用いられている。また用例も大変多く、総採集語数の約半数をこれらの俚語が占めているが、その分布状態をみるとどうしても周圏的であるとは思われない。では周圏によらず、どのようにして全国的に分布したかということになるが、私はここで各地における語彙の自然発生というものを想定してみた。今これを仮にA型分布と名付ける。

語彙の自然発生とは、互に交渉のない地方においても、同じような俚語が夫々発生し、成長してゆくということである。但しその場合の命名方式は二次的であり、単純であるということが必要となる。地蜘蛛について考えてみると、この蜘蛛は

建物の土台や立木の根もとに細長い袋をおろして、土の中にもぐっているのであるから、普通の地上の蜘蛛にくらべて、地の中の、土の中の、或いは、穴の中の、袋の中の蜘蛛という意味で、ジーグモ、ツチーグモ、アナーグモ、フクローグモという表現は、至極素直にそのものを示しているといえる。また、二次的ということは、地、土、穴、袋および蜘蛛という語を一次的命名と考え、それらを組み合わせて二次的に利用したと考えることである。面白いことに、この蜘蛛に関する命名は外国語の場合も同様で、例えば英語ではこの蜘蛛を (the) ground-spider ドイツ語では、(die) Miniersp**i**nne といっている。**minieren** は (穴をほる) であるから穴ぐもと直訳できる。これらは我が国における比較的共通圏の広い俚語、ジグモ、アナグモに一致するわけで、このような例からも交渉の殆どない人々の間で、命名を一にすることがあるということが言える。

以上、ジグモ、ツチグモ等の俚語が全国的に各地にみられるにもかかわらず、周圏的分布を示さない理由を命名の方式の点から考えてみた。

「日本方言学」の中で林大氏が、語彙の分布について、

> 方言量の多いものにしても比較的少ないものにしてもその分布の様相を解釈するのには、少なくとも二つの道がある。一つは、それぞれの地域で独立に命名が行われたとするもの、一つは、或る一つの中心から伝播していった新語が、伝播の時期の前後に従って、波紋状に外から内へと順序に並んで残っているとするものである。

と述べられているが、ジグモ、ツチグモの例が前者に当ると思われる。後者はいうまでもなく蝸牛などの方言周圏論である。また、林氏は、同じ本で共通圏について論じられ、

> 共通圏では、同時に互に無関係な命名が行われたはずはなく、恐らく、すでにその記号を持った人々が移住したか、またはその記号の使用が模倣されたか、そのいずれかによって共通圏が成立したものと考えられる。(但し、一般的な命名傾向からして、各地でほとんど独立に同様の語形を発生させることが皆無であるとは言い切れない。)

と述べておられるが、私の考えでは、この但し以下に当る用例は相当に多いのではないかと思っている。前にも引用したドーザの「言語地理学」には「共通の原因が同じ強さで処々に存在する場合には、同一の意味変化が処々で独立に起り得る」と述べているが、私は語形変化の上でも同じことがいえると思う。

蟻地獄について、このような例を拾ってみると、スリバチムシ、チョコムシなどという俚語がある。もともと、この虫は神社の縁の下など、土の乾いたところに小さなスリバチ型の穴をほって、その底にかくれているのである。つまり、スリバチ（擂鉢）とか、チョコ（猪口）とかはその穴の形を表現したものといえる。このうち、スリバチムシの方は、東北、関東中部、近畿、中国、四国の各地にみることができ、いわゆるA型分布を示している。この命名が当を得ていることは、柳田国男氏も、「西はどっち」の（蟻地獄と子供）の中で、

擂鉢は形が何よりもよく蟻地獄の窪みと似て居た。それが此名をきくと成程とうなづく人ばかりで、どうして擂鉢虫というだろうかと、訝る者などは無かった。

と述べておられる。いいかえれば、スリバチムシという命名が、単純で素直であったということで、その為に各地で数多くの同型の俚語が自然発生したものと考えられる。

このほか、蟷螂におけるオガミムシの類、柳田国男氏の調査によれば（註一）、ヲガミ（伊勢、紀伊中）ヲンガミ（遠州磐田郡）ヲガミムシ（下野足利町同栃木町）ヲガミムシ、ヲンガメ（肥後球磨郡）ヲガミトヲト（近江愛知郡）ヲガメ（美濃、紀州、播磨、伊予、土佐、筑後、肥後）ヲンガメ（薩摩川辺郡）ヲガモ（豊前、対馬、豊後宮崎）ヲガマス（大和十津川村）ヲガンボウ（阿波宇山）ヲガンダラ（美濃根尾谷）ヲガンダムシ（美濃大垣市）等の例があげられているが、これは「この虫の高く差上げた二つの大きな手が、神を拝むやうに見えたからさう名づけたことを暗示し」ており、また分布の上では、ヲンガミヲガミムシ等の如く、必ずしも伝播によるとは思われないものもあるようである。学名の **Mantis religiosa** も、英語の **Praying Mantis** 独語の **die Gottesanbeterin** も、すべて同じ命名法と言うことができる。

また、「目高考」によれば、目高の俚語として、縫物に使う針を連想したと思われるハリウオ（新潟県東魚沼郡）ハリカッコ（岩手県気仙郡）ハリミズ（秋田県、岩手県、福島県）ハリメド（東京都北多摩郡、神奈川県埼玉県、群馬県、長野県）ハリメン（埼玉県入間郡）ハリンコ（福井県、兵庫県、熊本県、岐阜県）ハリンギョ（兵庫県美作郡）ハリゴ（高知県、徳島県、鳥取県）ハリコ（大分県、福岡県、熊本県、和歌山県）等の例が報告されている。これらは結果としては或いは周圏的に見えても、命名の過程は各地における自然発生が多かったと考えたい。

楳垣氏はまた、方言周圏論は語感逓減論、つまり「語感は、時がたつにつれてその新鮮さを失い、ぼやけてくる」という法則の上に立っていると説明されているが、命名が素直に単純になされた場合は語感の逓減率（逓減の速度）も比較的遅いのではないかと考える。つまり疑う余地もない素直な名称には人々も飽きが来ないのであろう。

（註一）柳田国男著「西はどっち」《蟷螂考》甲文社発行

ロ、C型分布

以上のことから逆に、周圏的分布を示すのは、命名が単純でない場合ということが言えそうである。その中でもまた更に、命名の素直さ単純さが問題になると思う。その程度は、ともかくもその語により、その物を容易に解釈することができるか、それとも、解釈しにくいかということにある。

解釈しにくい命名というのは、例えば、童詞の一節から生まれたもの、極めて特殊の連想によるもの、或いは時代の推移により連想のできなくなった語、或いはまた、それをしゃべった大人は分っていても子供にはその語源の解釈がむずかしかった場合などである。このような俚語においては訛音が多くあらわれ、また類推や語源解釈が盛んに行われる。私はこれを仮にC型分布と名づける（B型は、A型とC型の中間として後から述べる）。

例えば、「エンバホロホロ下が焼けとるん上あがれ」という童詞は、三重県飯南郡で地蜘蛛を掘る時に唱えるもので、エンバは（くもの巣）のことであるから「くもの巣をほろうほろう」といっていた詞の、はじめの一句七音がこの蜘蛛の俚語となった例である。これは蝸牛においてデンデンムシの俚語が生まれる例に似ている。このエンバホロホロは同じ郡の中でも、アンマホロホロになったり、アマホロホロ、アマホロ、アンマサン、アマグモ等に変ったりしている、同じく童詞の一節から生まれた例に、茨城県猿島郡のシタノカチカチという俚語がある。これは「シタノカチカチ下が火事だから上さあがれ」という地蜘蛛をほり出す時に唱える童詞からできた語であるが、同じ郡の中でもカチカチグモ、シタノカニ、カニグモと大変形の変った俚語が生まれている。このように童詞の一部が独立して出来た俚語は、それだけでは殊に理解しにくく、したがって語形の変化も著しい。

東京都の西多摩郡では、この蜘蛛が腹を切るという（実は子供がこの蜘蛛の頭部をつついているうちに爪で腹部を傷つけてしまうのであるが）大変かわった習性のあることから、サムライグモとか、カンペイグモとか呼んでいる。特に多摩村では、ダイカングモ（五十五歳男農業）といっている。そして村の中でも真中の関戸部落を中心に、オダイカン（四十二歳・女）オデイカン（二十歳女工員）オデカン（九歳・男小学生）オジャカン（二十一歳・女・農業十三歳・男・中学生）アカジャン（十二歳男）タンカチ（二十三歳・女・会社員九歳・男・小学生）と、遠く離れるほど語形が変っている。これなど孤立変遷が語彙的でなく、音韻的であるということの、よい例であると思う。また、蟻地獄の俚語に長野や岡山で

ミミットウムシというのがある。柳田国男氏はこれを、耳の遠いツンボの俚語、耳遠（ミミットウ）に似ているところから、この虫が聾だという話でもあったのではなかろうかと言っておられるが（註一）私はこれをツボムシ（壺虫）から同音牽引で、ツンボムシへ、そしてツンボ（聾）の俚語である、ミミットウへと変化したものと思う。ツボムシというのは勿論、巣の形に名付けたもので奈良県吉野郡、三重県鈴鹿郡等には現にその用例もある、ところがツンボムシを経てミミットムシに変ってしまうと一般の人々には解釈の余地がなくなってしまい、ミミントー（岡山県浅口郡）ミミンチャ（広島県御調郡）ミミンタエ（広島県御調郡）ミミスッテイ（岡山県呂久郡）ミーミー（岡山県小田郡）ミソスリ（岡山県上道郡）等と意味もなく語形が変っていってしまう。但し私はミミットー以後はC型分布と考えるが、それまでの過程、即ち、ツボムシからミミットーの生まれるまでは長野、広島で、それぞれ別な発生、つまりA型分布であると考えたいと思う。

次に、大人にはわかっていても子供たちには意味のわからない俚語がある。前にもあげた地蜘蛛の俚語、カンペイ（勘平）などはその代表的なものでカンペロ、カンビロ、カネグモ（以上いずれも千葉県君津郡）カンピロ（東京都北多摩郡）カンベ（埼玉県大里郡）等、音韻的な変遷が甚しい。

これらにくらべると、「すみれ」の場合の、スモウトリグサ、スモウトリバナ、スモウトリなどは、使う子供たち自身、よく語源が分っているので、（子供たちはこの草に相撲を取らせて遊ぶ）非常に用例が多いにかかわらず訛りすら殆ど見当らない（註二）。これなど私は勿論A型分布と考える。

（註一）柳田国男著「西はどっち」《蟻地獄と子供》三二六頁

（註二）「方言」第五巻第一号佐藤清明《全国菫方言集》

ハ、B型分布

次に、全く単純だというわけではないが、よく考えてみると、かえって成程と感心させられ、自分も使ってみたくなるような命名、一ひねり、ひねってはあるが、よくその特徴をとらえている命名がある、私はこのような語が最も周圏的に広く分布するのではないかと考える。気のきいた表現は周圏論の中心に立つべき都会人の最も得意とするところであり、また、すぐに使い古されるものも、そのような語である。「蝸牛考」にとりあげられた俚語、地蜘蛛におけるハラキリ系、蟻地獄におけるアトサリ系の俚語等がこれに当ると思われる。私はこれらを仮にB型分布とした。蝸牛については、既にくわしく

論じられてあるので、ここでは後の二つについて考えてゆくことにする。まずハラキリ系は、さきにも述べたこの蜘蛛の腹を切ることに対して命名した一連の俚語である。ハラキリ、セップク、ジサツグモから、サムライ、ブシサン、トノサマ、ダイカン、カンペイ、ハンガン等、まさに枚挙に暇なしといえる。この分布範囲は九州を除く略々全国的で、特に関東地方には俚語の量も種類も多い。しかしその中心は東京ではなく、埼玉県か、或は東京都でも三多摩地方になるのではないかと思われる。

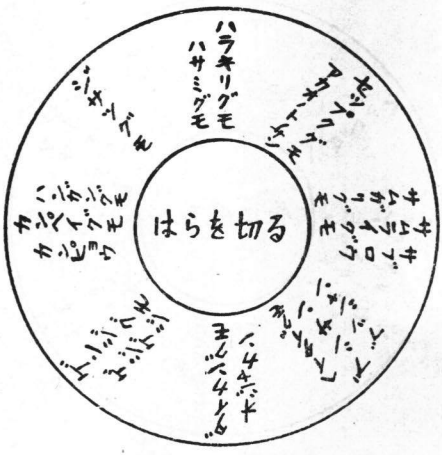
東京の都心部にも地蜘蛛は沢山おり、子供たちはやはりこれをとって遊ぶが、その呼び名は殆どツチグモの一語に限られているようである。ここでは小林好日博士が、「方言語彙学的研究」で述べておられる。

中央の社会は緊密な機構を持つ集団であり、言語を支配する規範が比較的強力である為、統一が保たれる。

という考え方が適用される。

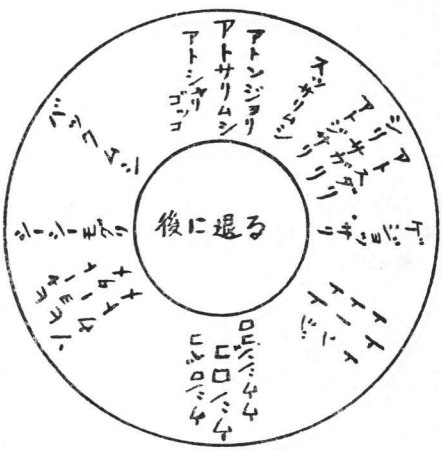
そこでさきのハラキリ系であるが、その分布は単に語形が似た俚語の周圏ではなく、意味の似た俚語の周圏、または同義語の周圏ということができる。つまり、他の土地で気のきいた新しい命名を耳にした人が、その俚語をそのまま記憶して戻らずに、命名の着想だけを心にとめて帰り、同じ着想で新しい俚語をつくりあげるということがあるように考えられる。第一図はそれを図示したもので「腹を切る」という意義で全体が結ばれている。

第一図



また、この場合周圏の中心がはっきりしていないことについては、小都市の発達や、マス・コミニケーションの進歩なども考えられるが、何といっても対象（地蜘蛛）が、大人たちの日常生活に縁遠い存在であるという点が影響していると思われる。その点、蝸牛などは子供の相手ではあっても、季節的なものであるため、歌や俳句にもよまれたりして、文化の中心地でももてはやされ、そこで生まれた新語が、大人たちにより遠くへも持ち運ばれる機会が屢々あったものと考える。

第二図



次に、蟻地獄のアトサリ系とはこの虫が前に進むことができず、後へ後へと退る習性によってつけられた一連の俚語をさす。アトサシムシ（和歌山県長野県、奈良県）アトージョリ（和歌山県愛媛県）アトスダリ（岡山県小田郡）アトシャリゴッコ（山梨県、埼玉県、東京都北多摩郡）アトジサリ（奈良県吉野郡）ウシロコ（栃木県千葉県）シリサガリ（山梨県茨城県）スッサリムシ（石川県河北郡）ソートメ（山口県）ヒョータメ（広島県御調郡）トート（大分県福井県）バックムシ（栃木県那須郡）等全国的に分布している。これなどは、むしろさきに述べた各地の自然発生、つまりA型分布と考えてもよいと思うが、若し周圏的であるとすれば第二図の如く（後に退る）という命名の着眼だけが周圏的なひろがりをしそれについて各地の俚語がえらばれたり、創作がされたりしたものと考えるべきである。

目高の場合では〈小さい魚〉という表現の〈小さい〉ということを「コマイ」という例と、「チサイ」という例とを略々同様に比較することができる。コマンジャコ（近畿一帯）に対するチビンジャコ（愛媛県温泉郡）、コメンジャコ（近畿一帯）に対するチメンジャコ（兵庫県袖崎郡）、コメンジョ（岐阜県、石川県京都府、静岡県）に対するチミンジョ（愛媛県温泉郡）、コンパイゴ（岡山県久米郡、真庭郡）に対するチンパイゴ（岡山県苫田郡）、コミャート（岡山県浅口郡、都窪郡）に対するチンミャート（岡山県都窪郡）等、語形の伝播というよりは意味の伝播といえる。

また、さきに述べた蟻地獄の俚語スリバチムシのスリバチ（擂鉢）を、その土地の俚語でおきかえた岩手や宮城のカラゲエムシ、青森のシラカムシ、岡山のスリコバチ等は、全国的にみればA型分布とも考えられるが、東北地方について考えるとA型分布から派生したB型分布ということもできる。

また、蟻地獄の俚語には同じ趣向の命名で、チョコムシ（猪口虫）というのがあるが、命名法から考えるとA型に属するように思われる。ところが実際に分布図をえがいてみると、宮城、岡山、徳島、長野、静岡、神奈川、千葉、茨城等、主として太平洋沿岸に限られることから、風位の俚語の分布にも似た単純なB型とも考えられる。

むすび

以上述べてきたところをまとめると、要するに俚語の分布というものは、その命名の方式の単純さ、複雑さに影響されるところが大きいのではないか、即ち命名が極めて単純な場合は、伝播によらぬ各地の自然発生が多いと考えたい。また、命名が極めて複雑な場合は、音韻的な孤立変遷を起すことが多いのではなかろうか。そしてその程度が丁度適当である時に、柳田氏のいわれるような周圏的分布を示すのではないかと考える。

A型分布——自然発生的
（命名方式が極めて単純）

B型分布——周圏伝播的
（命名方式がやや複雑）

C型分布——孤立変遷的
（命名方式が極めて複雑）

更に、その単純さ複雑さということは、命名されるものと、命名する者によって大体決まるもので、結局は命名される物（蝸牛、地蜘蛛等）の特徴や、命名する者の年齢、教養等が影響することになろう。

ここに、柳田氏が蝸牛を対象として鮮かに証明した方言周圏論も、そのまま他の俚語には適用できない一つの限界があるのではないかと考える。

また、「蝸牛」の俚語分布は周圏的であり、「地蜘蛛」の場合は自然発生的であると、一概に決めてしまうことも誤りで、同じ「地蜘蛛」の俚語でも、フクログモ、アナグモ等は自然発生的であり、ハラキリ系は周圏的、エンバホロホロ等は孤立変遷的であるといえる。同様なことは「蝸牛」の場合にも当然考えられることで、厳密にいえば俚語の一つ一つについて、その分布は考えられるべきである。

以上、未熟ながら俚語の命名方式と分布相について考えを述べた。大方の御叱正を仰ぐ次第である。

〔あ と が き〕

本稿は去る昭和三十一年六月三日、京都における国語学会研究発表会での発表「方言周圏論適用の限界について」に手を入れたものである。

――東京都立小金井高教官――